平安京と中世の村－遺跡の見方と考え方について－

鋤柄俊夫

同志社大学文化情報学部

はじめに

遺跡はある日偶然に見つかるものではない。遺跡は、その場所になければならなかった理由が必ずあって、その結果としてその場所に存在するのである。

考古学研究の基本は分類と比較にある。ゆえに、考古学が研究対象とする諸要素の中でも、最も中核的な位置にある遺跡についても、これまで、個々の遺跡に対する詳細な分類と比較をおこなうことが重要な研究方法とされてきていた。たとえば環濠集落、たとえば古墳、たとえば城郭研究など。しかしそういった方法による遺跡研究の結果が、その遺跡の実態を必ずしも正確に示しているわけではないことが最近わかってきている。

遺物研究の場合、一般にそれは有効なものとされてきた。しかし遺物研究においても、出土状況を考慮しない分類と比較が、その遺物の持っている歴史性を忠実に反映できないことも明らかになってきている。遺跡の場合は、この見方をさらに強く意識しなければならないのである。

別の表現をすれば、遺跡の「出土状況」への注目である。同じ規模や形の集落でも、それが存在する地域のどんな場所（地形・交通・気候・再生産の基盤の種類そしてなによりも重要なのが集落相互の関係）にあったかで、当然担っていた役割はまったく異なる。さらに遺跡は、そこで行われたさまざまな生活の営みの痕跡の最終景観を示していることも注意しなければならない。現在目の前に存在する遺跡は、当初の意図で造営された姿を保って現存するものではないのである。多くの大型遺跡は長い利用期間の間に、さまざまな加工や修正が施され、当初に築かれた姿を保っているものは少ないのである。

従来遺跡を見る場合、こういった視点はあまり重要視されてこなかった。しかし遺物以上に多様な形で人間と関わってきた遺跡を理解するためには、遺物以上にそれをめぐる環境に配慮しなければならないのである。考古学がその研究対象の中核とする遺跡を見る際には、これまで一般に行われてきたような、それらを個々に分断して分類し比較する方法以上の工夫をしなければならない。その中でも一番避けなければならないのは、遺跡を遺物と同じ方法で分析することであろう。

それではどうしたらいいのか。現在それをすすめるための２つの取り組みを考えている。最初は歴史的な景観復原である。古代・中世の人達が住んでいた場所も生活も社会も、現在の私たちと同様に、彼らにとってみれば別に特別なものではなかった。

彼らはあるときは必要に迫られることがあったとしても、結果的にそこに住むのが当然だったからそこに住み、その地域にとってあたりまえに適した生活をしていたはずである。したがって、古代・中世の人々の歴史を叙述するためには、まず最初に、そんな彼らが生きていた世界に立ち、彼らが見ていた風景を見ることが必要となる。その同じ世界に自分を置いたときに、はじめて、地域における臨場感のある歴史叙述が可能となる。したがって遺物と違う方法で遺跡を分析するためには、まず最初に詳細な遺跡情報に基づいた臨場感のある景観復原をおこなわなければならない。

しかしそんな人々の生活も、さまざまな要因によって変化を始める。あらゆる共同体社会は、それが持つ自生的な原因や外圧によって変化し、なかには、そこでの生活に終止符を打って別の場所に移動する共同体も現れる。いわゆる遺跡の消長は、このような、地域における共同体間の社会力学的なメカニズムを背景にもっているのである。そしてそれはちょうど適正配置の理論によって説明される諸現象と類似する。故、集落遺跡による社会構造の説明は、遺跡情報の適切な数量化に基づいた適正配置の理論が大きなてがかりと考えている。

以下、この視点によって、平安京と中世の村を見直してみたい。

1、詳細遺跡情報の取得と共有

同志社大学では2002年２月から、今出川キャンパスの整備に伴い、発掘調査をおこなってきた。これまでの調査で平安時代の貴族を代表する藤原氏筆頭の家系にあたる近衛家の別邸、室町時代の政治の中枢であった足利将軍邸の通称「花御所」、室町時代の京都市民に最も大きな影響力を与えた法華宗寺院の本満寺など、室町時代の京都を代表する武家・公家・宗教の３大勢力の拠点の調査をおこなってきた。

今回の調査は、その原因がキャンパス整備の工事を前提としたいわゆる緊急調査である。しかし大学が調査をおこなう以上、それは大学の研究調査にふさわしいものでなければならない。そこで現在の遺跡研究を発展させるために必要な、詳細遺跡情報の取得と共有化の開発を、従来の発掘調査の目的に加えることにした。

そのために、「発掘調査」＝「遺跡情報取得」という考え方を徹底させ、そうであるならば、現在の技術環境の中で、最も合理的に遺跡情報を取得するためにはどんな方法が適切かを考えた。発掘調査の技術と方法は、現在汎日本的に高いレベルで平均化している。しかしそこで得られた遺跡情報の記録と活用については、様々な要因によって大きな差が生まれている。一般的に、発掘調査で生まれる膨大な量と種類の遺跡情報は、その一部が記録され、さらにその一部が公開されている状態で、考古学と歴史研究は、その一部の情報によって進められていることになる。しかし本来はできるだけ多くの遺跡情報をできるだけフレッシュな状態で（ニュートラルな状態で）その遺跡に関心のある多くの人に提供すべきであり、それが研究だけではなく、遺跡をさまざまな形で活用する際にも大きな原動力となるのである。遺跡情報が限られていれば、期待される活用も当然限られてくる。詳細遺跡情報の

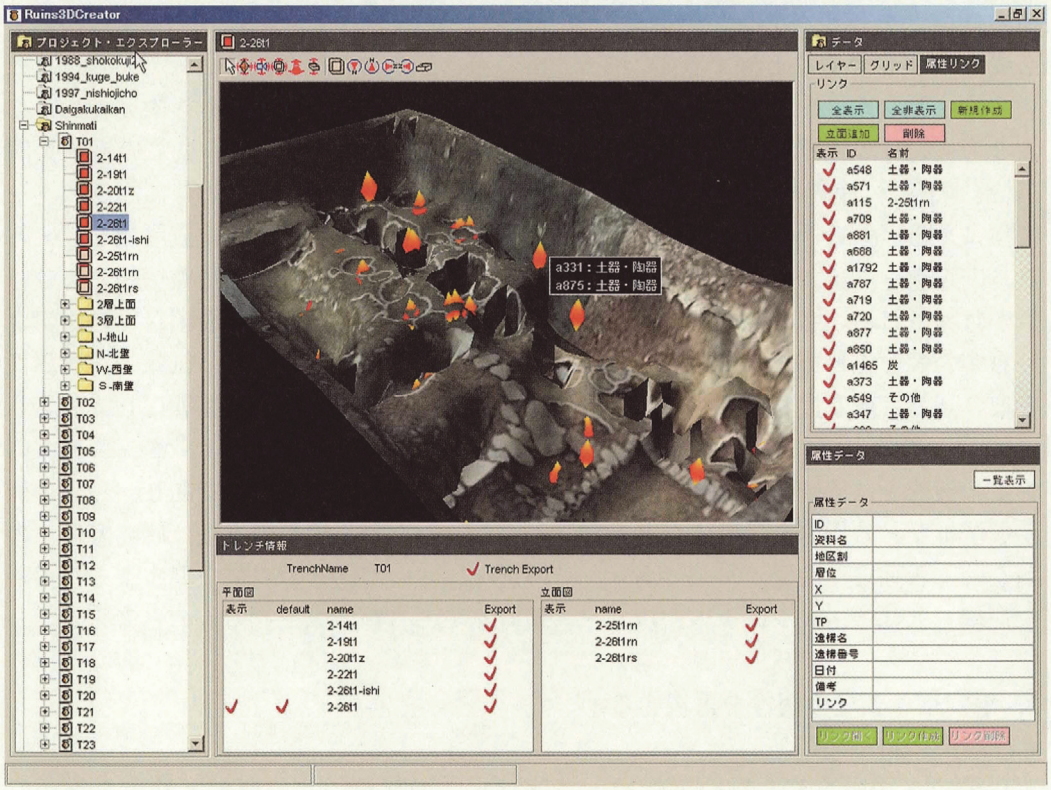

図 1　遺跡情報公開システム

取得と共有は、これからの遺跡活用にとっても必要な要件なのである。

そこで今回の調査ではこれまでおこなわれてきた、アナログな遺跡情報の記録法をやめ、写真測量を中心とした遺跡情報のダイレクトな取得をおこない、さらにその全てをweb公開することにした。

同志社大学今出川キャンパスの遺跡情報公開システムは、これまで有限空間である紙ベースで提供されることによって、やむをえず取捨選択されてきていた遺跡情報を、デジタル化することで無限空間に展開し、発掘調査時の臨場感も伝えられるほどの、できるかぎり多くの情報を公開するものである。その意味で本システムで公開される遺跡情報は、今回の調査を担当した鋤柄の遺跡に対する関心と能力の限界も示していることになり、本システムの利用者は調査をトレースする中で、遺跡に対する厳密な議論を鋤柄とすることが可能となる。

遺跡情報公開の方法がアナログからデジタルに移行する現在の状況を勘案し、本システムの基本思想は、これまでの紙報告書のイメージを遵守した。

基本的に発掘調査は、トレンチを設定して、そのトレンチ単位でおこなわれることが多い。そこで本システムのデータ構造もそれに従い、発掘調査で得られたあらゆるデータ（遺構写真・ベクター形式の遺構図面・包含層出土の遺物写真および遺物図面など）は、トレンチ毎のフォルダーに格納されている。利用者は全体の遺

構配置図から必要なトレンチを選択し、そのトレンチのフォルダーを開けることで必要な情報を得ることができる。

また実社会が3次元である以上、仮想空間に配置される遺跡情報も3次元であるべきと考え、本システムの基本的なデータ形式はベクトル形式とし、全ての遺構情報（上端・下端・等高線・石などの輪郭）はベクター線で示されると同時に、ラスター変換によるテクスチャ表示も可能としている。遺構は全て中心点の位置座標を与えられ、CSVデータによる属性データベースがリンクし、これに必要な遺物情報および写真が付与される。さらにCSV形式でリンクされた遺物情報は、必要な項目での検索と分布図の表示を可能としている。また、既往の調査成果についても、紙報告書を画像で取り込み、とくに図面はベクトル変換によって3次元化の可能な状態にしている。

なお、現時点で、本システムに付属する解析機能は無い。これは、本システムの第1の機能を位置情報の付与された遺跡情報の公開機能としたためであり、今後は簡易な解析などの機能を付けることも考えている。ただし、解析の方法は研究者個々の関心による独自な開発が本来であり、その意味において、その開発を促すような情報が提供できれば、本システムが担うべき現時点での責務は果たせるものと考える。

2、平安京－天皇の個性を再現する－

（1）里内裏への視点

平安京と中世京都を物語る遺構と遺物は、この都市の長い歴史と繁栄を物語るように、いたるところでみつかり、その量もまた膨大である。これまで考古学は、これらの資料群を対象にして、都城設計の研究に始まり、『平安京提要』でまとめられているように、文献史料との協業によって、一町単位での邸宅と人々の歴史を知ることができるまでに、多くの成果をあげてきた。

たとえば、左京三条四坊四町では、三条大路側溝や邸宅南の築地が発見され、10世紀の溝からは、緑釉・灰釉陶器と越窯磁器が出土し、11～12世紀の井戸からは、白磁四耳壺をはじめとする大量の中国陶磁器が出土している。この場所は10世紀には、三間の檜皮葺きの屋敷を構えた藤原尚範の娘または藤原貴子の邸宅とされ、その後平安時代には藤原季成とその子の藤原公光を経て、後白河天皇皇子の以仁王の高倉宮がおかれたことで知られている。この場所の発掘調査の成果が、このようなこの場所の利用者の動向を反映したものであることは言うまでもなく、なかでも平安時代後期の中国陶磁器類は、藤原季成以来のこの場所の居住者の社会的な地位の高さを示すものとして注目されている。

重層的で長い歴史を持つ平安京と中世都市京都では、このように残された史料と遺跡調査の資料を検討することによって、土地利用の変遷から、それぞれの時期の居住者の生活を推定することが、現時点での一般的なテーマとなっている。

都市あるいは集落遺跡研究の課題のひとつが、その社会構造の説明であるとき、こういった調査地点毎の土地利用の変遷を明らかにすることは、そのための重要な基礎

研究である。しかし、平安時代の人物と邸宅の関係は、一般的な多対１や１対１の関係だけではなく、１（１人）対多（複数の邸宅）の場合も知られており、その場合、その邸宅跡から発見される考古資料は、その人物にとっては、その邸宅を利用していた一時期の生活スタイルを示しているにすぎない時がある。したがって平安京の遺跡研究でも人物に目を向けようとするならば、その人物が関係したある時期の邸宅だけでなく、その人物に関わったすべての邸宅に目を向けることが必要になってくる。

ところで天皇は、平安時代中期を過ぎるころから、度重なる内裏の焼亡に対し、内裏とは別の邸宅を里内裏として移り住む行為をおこない、その状況は、邸宅研究の一部で説明されてきた。ところが先に見てきたように、これまでの平安京研究の視座は邸宅にあったため、里内裏を転々とした、それぞれの天皇の姿は、別々の邸宅に断片的に登場するのみとなっていた。しかしその天皇の本来の姿は、特定の里内裏ではなく、渡り歩いた里内裏総体の中から見えてくるはずである。たとえば、天皇毎に里内裏の位置を整理し、その場所と調査地点データの重複するケースがあれば、その集成は、その天皇とその時代のまとまった特徴を物語る資料になるのではないだろうか。

（２）天皇の移動パターン

円融以降、ほとんどの天皇が里内裏を利用することになるが、このうち移動回数の多い天皇は、後冷泉・白河・堀河・鳥羽・崇徳・近衛・六条・高倉・後鳥羽・土御門・順徳・亀山で、後冷泉と亀山を除き院政期に集中する。その原因は、実際の内裏の火災以外にも、天皇を巡る政治勢力との関係も推測されるが、本稿ではこれには触れる余裕はない。

移動範囲であるが、これまでの邸宅研究によっておおむね確定されてきている里内裏を基にすると、各天皇の移動は、大きく二つのパターンに分けられる。

ひとつは、おおむね左京三条以北内を移動するもので、円融から後三条までと、後鳥羽以降で花園までがそれにあたる。なお後冷泉は四条まで足をのばすが、中心はやはり三条以北である。利用されている邸宅は、後三条までが一条大宮院・東三条殿・枇杷殿・二条殿などであり、後鳥羽以降は閑院・大炊殿であり、この時期の場合、とくに一条・京極・東洞院・大炊殿周辺の邸宅への集中が著しく、ほとんどの里内裏がこの地区と閑院に集まる。

もうひとつのパターンは、里内裏の移動範囲が六条までひろがるもので、白河から安徳までのほとんどがそれにあたり、土御門と亀山がこれに加わる。ただし、後鳥羽は三条以北の移動に限定される。なお、波乱の運命を送った安徳は、平安京域内では五条以南のみの移動である。

こういった行動様式がそれぞれの天皇の支持基盤によるものであることは明らかで、たとえば堀河院は二条南堀河東の二町を占める藤原基経の邸宅であり、貞元元年（九七六）に内裏が焼けた時、藤原兼通の邸宅であった堀河院に円融天皇が遷御し、内部を内裏のように作り直したという。また三条大宮殿は元左大臣源兼明（醍醐天皇皇子）の御子左第の一部で、権大納言藤原長家と太政大臣藤原信長の邸

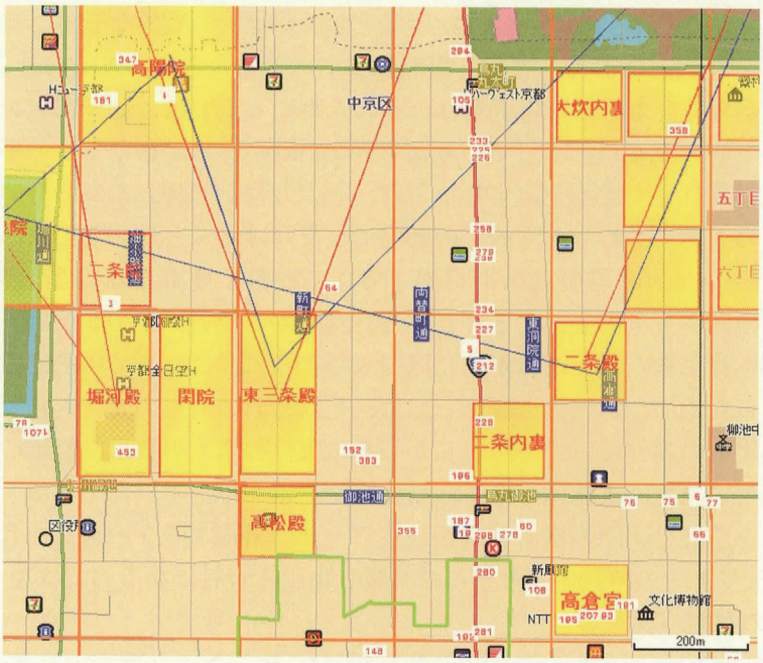

図 2　里内裏と調査地点

宅でもあり、位置は三条二坊三町に比定されている。さらに二条第は清和天皇皇后の藤原高子の小二条院（山吹殿）がおかれていたが、関白藤原教通が入手し、二条殿（小二条殿）と呼ばれたとされる。いずれも有力な摂関家との関係が指摘できる。

これに対して里内裏の移動範囲を六条までひろげるグループは、平氏との関係が顕著に認められるものであり、逆に後鳥羽以降のグループは、鎌倉幕府が開かれたことによる六条周辺との関係の消失を如実に現しているものと言える。

ただしこれらの動きは、あくまでそれぞれの天皇の個人的な事情によるものも含み、それがそのままその時代の権力と都市における場の関係を示している訳ではないことは言うまでもない。この点については稿を改めて考えてみたい。

それでは、このような天皇の里内裏移動行動に対して、これまでの発掘調査地点の情報はどのように対比できるのであろうか。

（3）調査地点データとの対照

これまでの調査地点データ（鋤柄2002「都鄙のあいなか」）との関係をみていくと、個々の天皇の移動里内裏と調査地点データが重複する例は、後冷泉が高陽院・四条宮第、白河が高陽院・堀河第・三条烏丸殿、堀河が高陽院・堀河院・三条烏丸殿・崇徳が土御門烏丸殿・三条京極殿・小六条殿、鳥羽が高陽院・土御門烏丸殿・小六条、近衛が土御門烏丸殿・近衛殿・四条東洞院殿・小六条・六条烏丸殿・東三条殿、二条が大炊御門高倉殿・押小路東洞院殿・八条坊門殿、安徳が八条坊門殿・五条東洞院殿、順徳が高陽院・三条殿である。

調査地点データ個々の詳細な検証は困難であるが、一例として、近衛天皇が5

カ所でもっている、重複する調査地点データのうちで、天皇の在位期間に該当する1141～1155年の状況を、12世紀代の資料について対照してみたい。

土御門烏丸内裏では（201）山茶碗と白磁が（259）で土坑とピットがみつかっている。

小六条殿では（293）の溝２が烏丸小路西側側溝と推定されており、土師器皿、白磁碗・壷、青白磁碗、黄釉鉄絵盤、褐釉壷などが出土している。

六条烏丸殿では（255）から方形木枠の井戸がみつかっている。（238）からは白磁碗を中心とした陶磁器が出土。（297）では、根石を納められたとされる土坑や、土師器皿溜まり、井戸など。（256）からは柱穴群、（257）からは、六条大路北溝とされる溝や井戸よび土坑群と青白磁合子蓋が出土している。

近衛殿・四条東洞院殿では該当する時期の資料が得られていない。

他の天皇とその里内裏行動様式による考古資料の検討を経ないといけないが、現状において、近衛天皇が利用した時期の里内裏に共通するように、白磁四耳壷・黄釉鉄絵盤・青白磁合子などの特殊品がめだっていることになる。あくまでたたき台であるが、現状でこれらの遺物による組み合わせが、近衛天皇の個性と対応することになるはずである。

（４）おわりに

京都市内は、そこが連続して利用されてきた都市遺跡であるため、遺構の残りが悪く、ともすれば遺跡から離れた遺物研究を余儀なくされてきたきらいがある。しかし周知のように、遺物はそれが発見された時の情報によってはじめて存在するものである。その点で、本稿の視点は、遺物をその本来あった場所に戻してその歴史的な意味を考えるための、ひとつの試みである。さらにこの考え方は、考古学だけでも、また文献史研究だけでも進められない学際的な視点を必要とするものであるが、なかでも空間情報科学の視点が重要な位置におかれるものと考える。これまでの平安京研究は、邸宅や調査地点に考察の視座がおかれてきたが、人物に注目して、その人物が利用した場所を組み合わせていったときの規則性の検討は、これまで断片資料として十分な検討を加えることの出来なかった、かつての調査資料の有為な活用研究としても、重要なテーマではないかと考える。

3、中世の村

（１）普賢寺谷の中世館群

同志社大学京田辺キャンパスが所在する南山城地域（宇治市以南）は、1485年におこった「山城国一揆」に象徴されるように、室町時代の有力な在地領主が多く居住していた地域として知られており、現在もそれを物語るような城館跡が各地に点在している。

例えば精華町に所在する稲八妻城は、その麓の稲八間を拠点とする国人の城で、精華町の西方に位置する北稲八間の丘陵上に立地する。東に木津川を見下ろし、南の谷からは河内へつながる交通の要衝である。「大乗院寺社雑事記」の文明17年（1485）にみえ、山城国一揆の最後の砦として有名である。

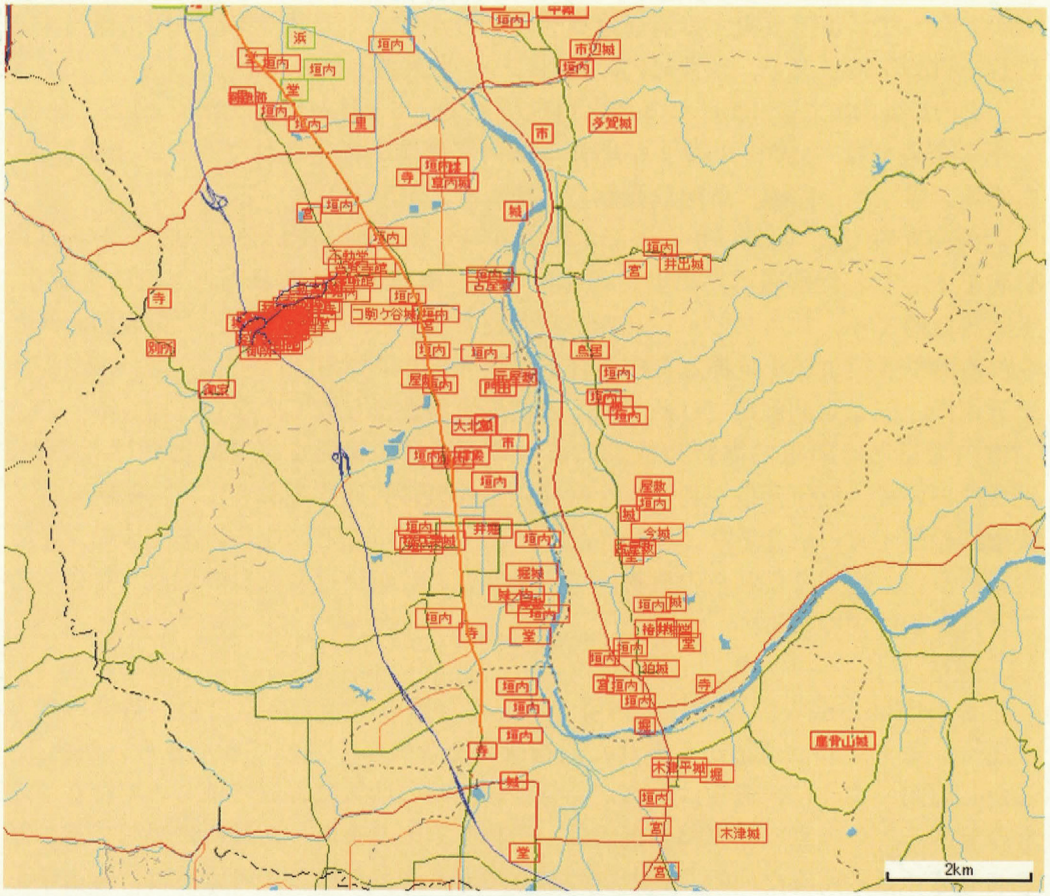

図 3　南山城中世館分布図

木津城（木津町）は木津駅から西へ位置する丘陵頂部に立地する。「経覚私要鈔」の文明 3 年（1471）の記事にみえ、眼下に奈良街道と木津川を見下ろす。規模は南北60m、東西45mで郭の周囲に土塁をめぐらせた単郭構造とされる。木津町殿城に推定されている館とセットで、室町期木津郷の在地領主である木津氏との関係が推定されている。

さらに、このような明確に遺跡として認定できる城館跡以外にも、この地域には城館関連名称（古屋敷・堀・宮・寺・垣内・垣外）の地名も多く残されており、これらをあわせると、この地域における館を中心とした中世的景観のひとつの特徴がみえてくることがわかっている。

その最も典型的な例が木津で、その地域拠点を構成する要素が、木津城（山城）・木津平城（館）・宮寺（寺社）・垣内（集落）である。同様に、椿井も山城と垣内、祝園も城・屋敷・寺、大北城も宮・市・垣内の組み合わせをみることができる。

ここでとりあげた地名の全てが中世に遡るかどうかの検討は必要であるが（「垣内」地名の多くは現在の集落と重複しており、この地名が近世にとどまる可能性もある）、おおむね南山城の中世的景観の基本は、大字単位で点在する館を核として、

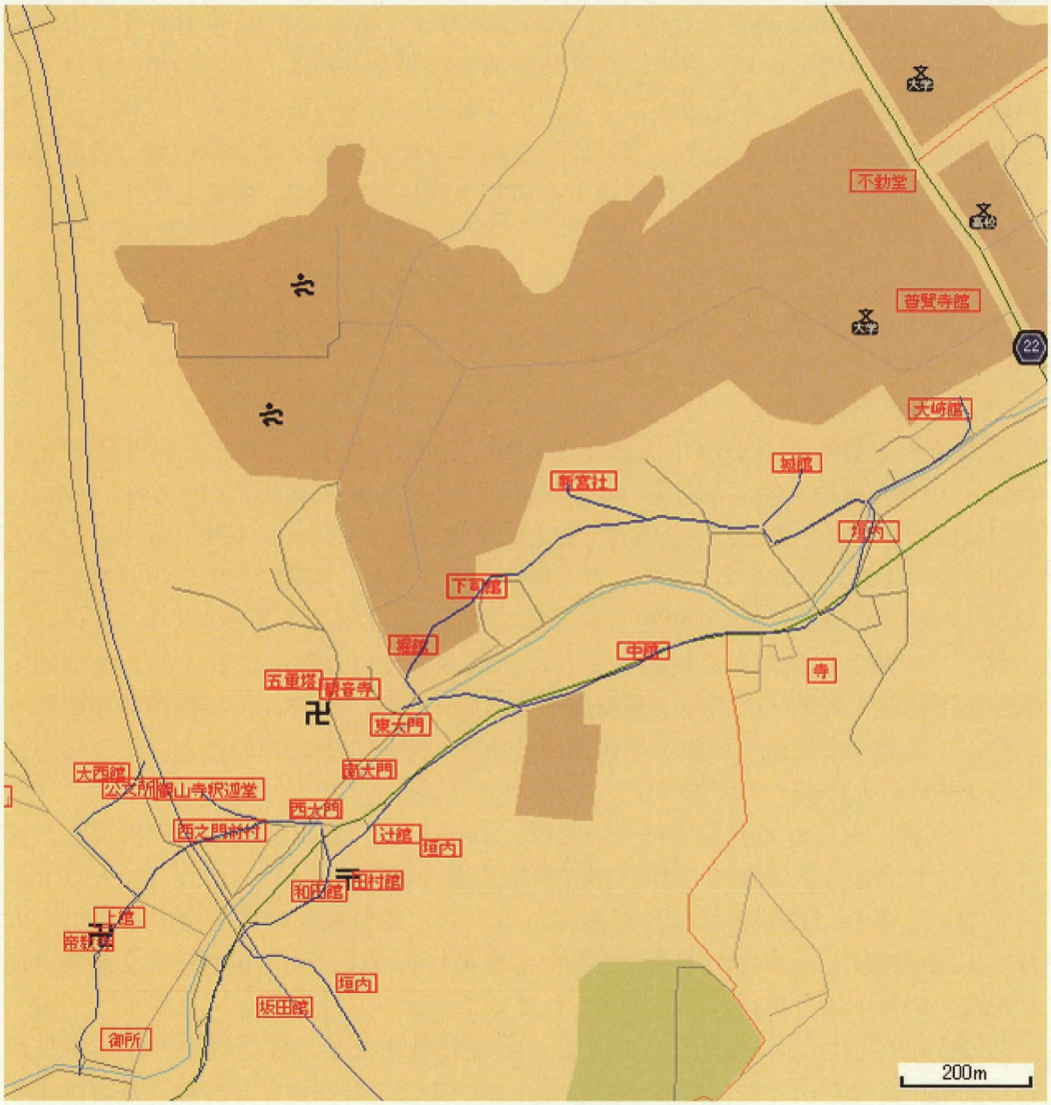

図 4　普賢寺谷館配置図

その周囲に集落が形成され、そこに宮または堂が付属する形であった可能性が高いと考える。想像が許されるならば、大字単位で地域を代表した室町時代後期の在地領主たちは、おおむね平均的な再生産構造（農業）を背景に、それぞれ卓越することのない協力関係をもっていたのではないだろうか。

ところが、同志社大学京田辺キャンパスの所在する普賢寺谷の状況はこれと異なる。普賢寺谷には、15世紀後半から16世紀代に営まれた中世館跡が分布する。それらは普賢寺谷の丘陵の尾根を削りだし、谷を埋めて平坦地を造成することにより、土塁または堀によって外部との境界を設けながら、連続する郭配置で密集した館群の構成をみせている。また垣内もそれぞれの館に付属するのではなく、谷全体の中で営まれていた可能性がある。

一方谷の精神的な紐帯を代表する寺院は言うまでもなく観音寺であり、これは他と隔絶する規模をもつ。さらに、遺跡の調査成果をみれば、個々の館の主は、中国製の青白磁を持っていたことにより、十分名主クラスの勢力をもっていたことが考えられるのである。したがって、普賢寺谷の中世的景観とは、南山城の各地でおよそ大字単位で居住していた在地領主と同じクラスの人々が、密集して生活していたことになるのである。

このような普賢寺谷の景観は、それ以外の城館跡とどのような違いによって生まれたのであろうか。

（2）中世村落の数量化

それを知る最初の手がかりは、天文2年（1533）に再画されたという正長元年（1428）の銘をもつ「興福寺別院山城国綴喜郡観心山普賢経法寺四至内之図」にある。この絵図は、検討を必要とする椿井文書として知られているが、京田辺キャンパスの分布調査により、中世後半に比定される館跡が発見され、実態をどれほど反映しているかはわからないが、同図の歴史資料としての見直しの必要も説かれてきている。

以下、絵図と関係記録を概観すると、記載されている館は普賢寺館・大崎館・城館・下司館・堀館・大西館・長岡館・奥西館・上館・高林館・坂田館・和田館・田村館・辻館・菊原館・西館・中西館・今中館・中館など19にのぼり、それらが普賢寺を中心にして描かれている。

一方史料にみられる普賢寺については、1493年に大北氏が稲八妻に出張し、普賢寺の上被官が在所を焼く事件、1567年に普賢寺谷で戦いがあって、100人以上が死んでいる事件、1569年に信長が摂津から攻め、普賢寺谷の城・今中・上松・大西・田辺を滅ぼした事件が知られ、また朱智神社石段には永正年間と天文年間（16世紀代）の今中氏と中氏の記名が残されている。

したがってこれらのことから、少なくとも15世紀後半には普賢寺谷に館が築かれ、その中には在所と呼ばれる集落も存在し、またこの普賢寺谷の勢力に対抗する集団にとっては、この谷を攻撃しなければならないほどの影響力があったとも推定できることになる。

したがって、現地に遺されている遺構と絵図を考慮すれば、遅くとも15世紀代にはこの谷に、多くの館群と集落から構成される都市的な景観がひろがっていた可能性は高いものと考えられる。

ところで山城と大和と河内の境の山頂にあって息長氏の祖先神を祀る天王の「朱智神社社記」によれば、神社の神事（八坂神社に榊をおくる）にあたる家筋の朱智（後の普賢寺家）・息長（後の下司家）・三国（のちの）氏が分家して七家になったとされており（普賢寺・下司・大西・菊原・長岡・中西・城）、普賢寺谷の館群に住んでいた人々は、朱智神社の神人か、近衛領の下司など（在地領主で荘園の管理官になったもの）ではとの見方もある。

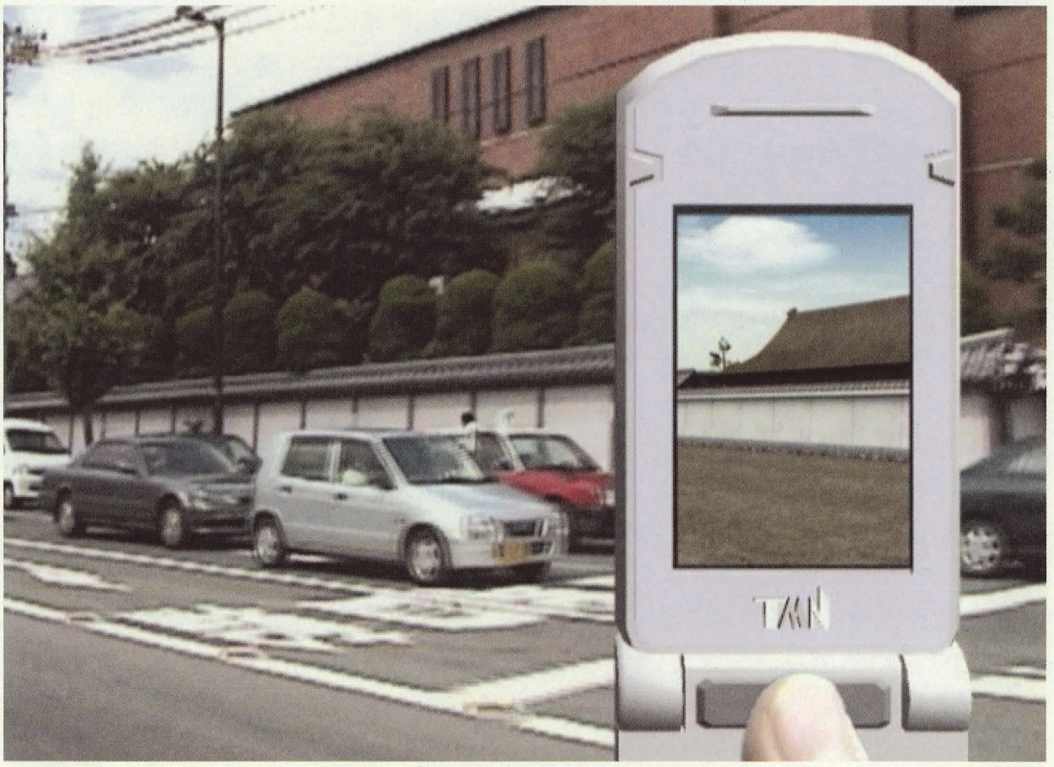

図5　携帯電話による歴史遺産活用

またこの谷が興福寺領の荘園：普賢寺郷＝朱智荘または朱智長岡荘（高木・南山・出垣外・宮ノ口・多々羅・上・水取・高船・打田・天王）であり、２月11日には東大寺２月堂のお水取の松明を寄進する行事がおこなわれるため、東大寺また興福寺に関係した人々の集落であった可能性も考えられる。いずれも共通するキーワードは宗教であると言える。

そこであらためて、このように谷に館が密集して分布する状況を汎日本的に見れば、南山城では椿井地区でやや類似した傾向がみられるものの、全国的にも例は少なく、あえて比較するならば、福井県勝山市の平泉寺や和歌山県の根来寺など、政治・経済などでその地域に大きな影響力をもった寺院を中心とする城塞都市に共通性が指摘できる。

これらの点をふまえれば、これだけ大規模な都市的景観をもっていた普賢寺谷が、山城国一揆関係の記録にほとんど登場しない理由として、彼らが一般の南山城の国人や土豪とは異なった権利関係にあったことを指摘できる可能性もあり、それが朱智神社と観音寺の関係によるものであるならば、この谷の景観が、一般的な南山城の集落と異なり、室町時代後期に顕著となる、寺社を中心とした城塞都市と類似している点も、あながち偶然ではないかもしれない。朱智神社は祇園社との関係があり、観音寺は興福寺を本家としていた。戦国期の南山城が畠山氏の内紛に翻弄されていた時、この谷はそれと混じらない異質な空間を営んでいたのではないだろうか。

先に述べたように、南山城地域でみられる中世館は、館（屋敷・垣内・垣外・寺・市な

どの複数の因子の組み合わせで成立していた。もし仮に、この組み合わせが、畠山氏の内紛に影響される社会構造をもった南山城の中世村落を成立させる基本条件であると言えるならば、それらの因子に一定の約束の下で係数を与えて数量化することで、一般的な南山城の村落を成立させる基準値(平均値)をつくりだすことができることになる。

これに対しておそらく普賢寺谷の館群は、それらとは違った組み合わせであり、数量化によって異なった数値が導き出されることが予想される。そしてその場合、その差の意味のひとつは宗教と政治の相対的な社会関係の強さを示すものになる可能性がある。これまで地域における共同体の社会的な関係は、主に政治の力によって説明されてきた。しかし網野善彦氏が指摘したような多彩な中世社会が復原されるならば、そこには、政治以外の相対的な力学も働いていたことが予想される。遺跡（歴史遺産）の数量化とその評価は、そういった歴史に見直しにも必要な研究である。歴史遺産を数量化するための考え方を整理する研究が急務である。

まとめにかえて

考古学が中核的な研究対象とする遺跡の見方には、臨場感あふれる景観復原と適切な数量化に基づいた適正配置の理論の実体化が重要である。そしてこの目標の達成のために、重要視しなければならない視点が２つある。

第１点はその遺跡に関しての、できる限り多い偏りの無い情報取得である。遺跡は、従来の遺物研究よりはるかに多い情報を同時に分析しないと判定できない。私たちはその判定に必要と思われるあらゆる情報に対して、少しの先入観も持ってはいけない。もちろん遺跡の分析と解釈の過程で、研究者の歴史観による情報の選別と重み付けは当然おこなわれることになる。しかしその前提となる情報取得には、これまでの想像を超えた遺跡情報に対する偏りの無い姿勢が求められなければならない。

第２点は実在感のある人間へのこだわりである。考古学研究は、ともすればモノ資料への献身を目指すあまりに、本来の目的である人間の歴史への探求を忘れてしまうことがある。モノから人間を求めるはずが、実際はモノに始まりモノに終わっている研究が少なくない。その意味で、考古学が歴史研究の一分野であることと、その目的が人間の歴史の研究であることを改めて確認する必要がある。しかもここで注意しなければならないのは、抽象的ではない、いわゆるモデル的ではない生きた人間へのこだわりである。どこにでもいる人間ではなく、そこにいた、その場所にいた、その遺跡で生きていた人間へのこだわりである。遺跡と密着した、特定の場所を持った人間へのこだわりである。有名無名にかかわらず、人間の歴史はここではじめて語られることになる。現在そのひとつの試みとして、GPS搭載の携帯電話による歴史情報提供システム（知的クラスター創成事業によるプロジェクト８）を開発中である。できるならば、無名であっても有名であっても、個人名で語られる遺跡の歴史書が今後増えることを期待したい。

Heian-Kyo and Medieval Villages: Issues in the Study of Archaeological Sites

Sukigara Toshio

Faculty of Culture and Information Science, Doshisha University

Prehistoric sites are the primary subjects of archaeological research. Their contents can reveal a great variety of interesting details about the lives of their former inhabitants. By correctly understanding and accurately describing the characteristics of those locations, archaeologists are able to make valuable contributions to historical research. It appears, however, that most studies of archaeological sites conducted thus far have fallen short in this regard despite, or because of, the overwhelming quantity and diversity of the information provided by [such sites][their sources]. One of the problems seems to be the lack of attention paid to the relationships among multiple sites. Ancient communities in their time did not exist in isolation: their existence and survival must have depended on mutually beneficial relationships with their neighbors. The investigation of archaeological sites demands a different approach than the one employed in the study of individual artifacts. Emphasis should be placed on gaining an accurate picture of how communities in a given area interacted with each other based on the analysis of the vast quantity of information to be obtained from the ruins.

In order to ensure the thoroughness and accessibility of the immense amount of data to be acquired in the course of an archaeological research project, it is essential that researchers start compiling their findings into a digital database during the excavation phase. Doshisha University has been digitizing photogrammetric data of ancient structures, mostly in vector format, since its 2002 excavations, and inaugurated in 2004 a system that enables free online access to all of the data thus processed.

The ancient city of Heian-kyo is one of the most complex and multilayered of Japan's archaeological sites, but the majority of the vast quantities of materials unearthed have decayed beyond recognition. As a result, there has yet to emerge a comprehensive theory describing the characteristics of the early capital despite the abundance of information available, keeping the history of its former residents largely hidden from view. My project focused on Sato-Dairi, a so-called "temporary" imperial palace dating back to the later part of the Heian period, and sought to build an integrated theory about the [palace][place] based on the limited amount of information available. The idea was to establish an all-encompassing database of the property by linking together existing disparate data sources related to the subject, while the strategy consisted of obtaining location data about the emperors' behavior

and associating these data with those on the structures.

Located halfway between the sites of Japan's two old capitals, Heian-kyo and Heijo-kyo, the region of Minami-Yamashiro was the stage for a number of historic episodes in the Kofun and Muromachi periods. For example, it became the burial ground for some of the most powerful rulers of the Kofun period, namely Emperors Suijin, Ojin, and Keitai, and witnessed the birth of the country's earliest republican cities in the Muromachi period. What are the factors that allowed Minami-Yamashiro to serve such historically significant roles? My exploration of this question led me to focus on the issue of the "locations" of archaeological properties.

My hope for the GIS-based re-examinations of prehistoric sites is that their results will contribute to the development of historical books that depict their subjects, both famous and unknown, as living, breathing human beings.